



わが家が — 在宅医療という選択 いちばん

高齢化が進む中、切れ目のない医療や介護を受けられる体制が求められています。市では、住み慣れたわが家で、いつまでも家族と共に過ごせるように、在宅医療をサポートしています。

◎健康づくり課

☎34・3282

―病院から地域へ―

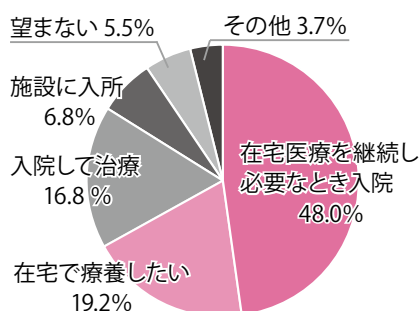
2015年11月現在、市内の75歳以上の高齢者数は約1万4800人。団塊の世代が75歳以上となる2025年には、3人に1人が高齢者（65歳以上）になると推計されています（グラフ1）。

全国的にも医療や介護サービスへの需要が高まり、現状の医療提供体制では、それに応じることが困難になると予測されています。そのため、現在の「病院完結型」の医療から、地域全体で治し、支える「地域完結型」の医療への移行が必要とされています。

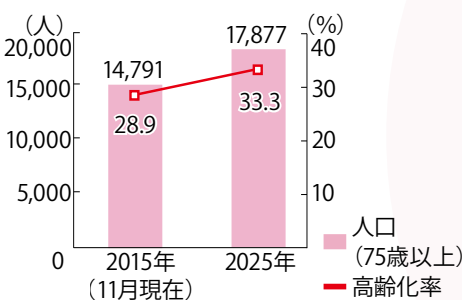
―約7割が望む在宅医療―

市では、昨年5月に40歳以上を対象に在宅医療に関するアンケート調査を実施。約7割の人が「できるだけ在宅で

療養したい」「在宅医療を継続し、必要になれば入院したい」と回答しました（グラフ2）。病状によりですが、医療や介護のサポートを受けることで、在宅で生活を続けることも可能です。病状が悪ければ一時的に入院し、落ち着いたら自宅に戻る「ときどき入院、ほぼ在宅」。誰でも住み慣れたわが家を中心に、医療を選択



グラフ2「問 あなたは在宅医療を望みますか」



グラフ1 島田市の人口と高齢化率の推移 (国立社会保障・人口問題研究所より)

することができるようのです。

―地域のサポート体制―

在宅医療では、患者さんを中心に、主治医のほか訪問看護師・薬剤師・歯科医師が連携し、自宅を定期的に訪問・診療します。同時に、介護支援専門員（ケアマネジャー）やヘルパーなどの介護スタッフが医療スタッフと連携し、患者や家族をサポートします。

現在、在宅医療のさらなる充実を図るため、来年度から、24時間対応の市の訪問看護ステーションを設ける準備を進めています。

―お気軽にご相談ください―

病院や診療所への通院が困難になったときなどに、安心して療養生活が送れるよう、皆さんの疑問や不安に専門スタッフが答えします。

【相談窓口】

・健康づくり課（上記）、長寿介護課（☎34・3288）
・かかりつけ医、歯科医、薬局、ケアマネジャーなど
・訪問看護ステーション
・高齢者あんしんセンター（便利帳37ページ参照）

～ わが家は最高の特別室 ～

支える家族の声



あまのちかこ
天野 千加子さん (大草)

在宅医療を利用しながら、
夫の療養生活を支える

夫

は7年前に脳幹出血で突然倒れて入院し、退院後は自宅での療養を続けています。最初は「一人で家でみるなんてできない」と思いましたが、市民病院のソーシャルワーカー(医療相談員)に相談したり、自分で調べたりして、納得した上で在宅療養を決めました。現在は2週間ごとの主治医の往診と訪問看護、毎月1週間の病院ショートステイを利用し、緊急時には、主治医が駆け付けてくれることになっています。

夫が外泊で居なくなると、かえって夫のことが気になり、一緒に居ることで安心でき、私の生活も支えられていると気付かされます。在宅療養は大変なこともあるけれど、今は夫の笑顔をそばで見れて、毎日楽しいと感じています。夫の表情からは「家が一番安心するよ」と言っているのが伝わってくるんです。

夫の笑顔に、私も支えられています

かたおか ひでき
片岡 英樹 医師

島田市在宅医療推進協議
会会長・片岡医院院長



不安を軽減するバックアップをしています

在宅療養を始める際、本人にも家族にも不安があります。私たちはそれを軽減できるよう、訪問看護師・歯科医師・薬剤師・ケアマネジャーなどとチームを組み、精神的なバックアップをしています。相談できる相手がいることで、患者さんも家族も安心を得られます。病状の進行により、家族の不安が増すこともあります。そこで私たちは先回りして、今後の見通しを説明し「家でみてよかった」と満足できる生活を続けられるようサポートしています。

救急時には、秒単位で処置を決めなければならぬ状況があります。自分の人生は誰かが決めるのではなく、自身で考えておくことが必要です。普段の何気ない会話の中で、自分の意思を家族に伝えておくことが大事だと思います。「リビング・ウイル」はその手段のひとつです。

医療現場の声

在

宅療養を始める際、本人にも家族にも不安があります。私たちはそれを軽減できるよう、訪問看護師・歯科医師・薬剤師・ケアマネジャーなどとチームを組み、精神的なバックアップをしています。相談できる相手がいることで、患者さんも家族も安心を得られます。病状の進行により、家族の不安が増すこともあります。そこで私たちは先回りして、今後の見通しを説明し「家でみてよかった」と満足できる生活を続けられるようサポートしています。

かねこわかこ 金子稚子さん 講演会

41歳の若さで急逝した流通ジャーナリスト金子哲雄氏の妻、稚子さんの講演会を開催します。在宅で夫を支えた経験に基づくアドバイスなどが聴ける貴重な機会です。



とき／2月7日(日)

午後1時30分から(午後0時30分開場)

ところ／プラザおおり ホール

申し込み／1月5日(火)から、下記にて入場整理券を配布します。

配布場所／保健福祉センター「はなみずき」、市役所本庁舎総合案内、金谷南・金谷北・川根支所、六合・初倉・金谷公民館

生前の意思表示「リビング・ウイル」

認知症や意識がなくなり、自身で意思表示ができなくなったときや、回復の見込みがないと判断されたとき、あなたや家族はどのような治療を受け、どこで療養することを望みますか。

「もしものとき」の治療やケアについて、元気なうちに考え、意思を記しておくことが、最期まで自分らしく生きることにつながるのではないのでしょうか。あなたの思いを、文字にして、家族に伝えておきましょう。



「リビング・ウイル」
ご希望の方は、健康づくり課・高齢者あんしんセンターへ